

## 野田政権発足に寄せて



あらい・さとし  
1946年北海道生まれ。70年東京大農学部卒、農水省入省。91年北海道総務部知事室長。93年衆院議員、日本新党代表幹事。新党さきがけを経て96年民主党。09年鳩山由紀夫内閣で首相補佐官。10年菅直人内閣で国家戦略相。現在、衆院内閣委員長。

元国家戦略担当相・衆議院議員  
荒井 聡

### 重い「雪だるま」を押し上げるため 党・政府が一体になった政権運営を

「どじょう」や「雪だるま」など、民主党代表選での野田佳彦首相の演説の巧みさが話題を呼んだ。「雪だるま」のオリジナル起草者は私だということから拙稿の機会を与えていただいたので、野田政権については民主党の政権運営に対して思うところを寄せてみたい。

菅直人さんが正式に退陣表明をした8月末、私は「代表選に寄せて」と題する文章をしたためて、数名の同僚議員たちに手渡ししていた。菅政権がなぜ短命に終わり、民主党政権はなぜ国民の期待に届ききれずにいるのか。また復興が迅速に進まずつまづいているのはどうしてなのか。私なりに去来する思いや内閣に参画した経験から反すうすること、次期代表となる方に同じ轍を踏んでほしくなかったためだ。

詳細に踏み込むことはしないが、民主党政治への失望を招いてしまったことは、①党内対立をやって挙党態勢、更には野党の協力も仰ぎながら復興にあたる体制を作ることができなかったこと②行き過ぎた政治主導を省み、与党が政策決定プロセスに関与する仕組みを構築することができなかったこと③歴史的な大震災に直面したことも踏まえながら、復興を最優

先させるためにはすぐには実現が困難となったマニフェスト項目については変更・修正するための政治的プロセスを確立できなかった、という点にある。

今のように参院が少数与党のねじれ国会の下では、政権運営が著しく困難となる。マッカーサー占領下、日本国憲法制定の過程で、マッカーサーは1院制を推奨した。それに対し当時の日本人が「日本人は熱しやすく議論が一方に走りやすい性向を持っているので、慎重な議論を担保するため」として2院制を主張した。参議院を作ることは、日本人自身が選択したのだ。

日本国憲法が想定していること、慎重な審議とそれを乗り越えていく政治的なタクティクスを磨くべきだ。政務三役も含め、与党議員は全員参加で国会対策にあたるぐらいの決意が求められている。

野田政権に代わり、民主党はこの2年間の政権運営を踏まえた政策決定プロセスへと移行する。政策決定について、新たに担当閣僚も交えた「政府・民主三役会議」を設置し、重要事項については丁寧な協議を行うこととする。またこれまで政調の各部門会議では、

政調副会長が座長にあたってきた経緯があるが、政府側の副大臣または政務官との共同座長制を採ること、政策立案段階から政府との円滑な意思疎通が図られるようになるものと期待している。

政権与党と政府は一体である。自民党の事前審査制が族議員を生み出したとの理由から、鳩山由紀夫政権下では政策調査会を廃止した。そのため政策形成に携われるのは、政務三役として政権入りしたものが一部党幹部だけとなったものか。多くの議員は自らの思い入りのある政策を実現しようと政治家になる。苦勞して議員になったものの政策決定プロセスには携われないと気がついたときの、若くて有能な議員たちの落胆ぶりは相違なものであった。

その後、菅政権になって政策調査会は復活するが、その位置づけは単なる政策提言機関にとどまっていた。しかし実際には内閣とは党に支えられており、一人一人の議員が政策の立案過程から参加して、初めて思いを共有することが出来るものだ。共有するからこそ知恵と汗を流し、それが一体化の礎となる。

今回の政策決定プロセスの変更は、政権運営の経験を踏まえて民主党が目指す「政府・与党一元化」

の姿に近づけるための軌道修正であり、一部にある「事前審査」への逆戻りだという批判はあたらぬい。いずれ税・社会保障一体改革やTPP（環太平洋パートナーシップ協定）への賛否など、党を二分する議論をまとめあげねばならない重大な局面において、新たな政策決定プロセスが機能するかどうか真価が試されることとなるであろう。鳩山・菅政権での蹉跌に学び、現実の中で行きつ戻りつしながらあるべき制度の姿を模索するしか術はない。

「雪だるま」のエピソードに込めた思いを記したい。

私の選挙区は、雪国の北海道である。雪の坂道で雪だるまを押し上げることを想像してみたい。足元はおぼつかないし、押し上げるにしたがって、雪だるまは大きく重くなっていく。そこでたくさんの助っ人が必要になる。押し上げる人が減ったり、内輪もめを起こしたりして力を抜くと、あつという間に雪だるまは坂道を転げ落ちる。転がり落ちながら雪だるまはどんどん巨大化していくので、転げ落ちた雪だるまをもう一度押し上げるには前回以上の力仕事となる。

政権を運営するとは、まさにこの類の作業なのである。一步一步

踏みしめていくしかないのだ。またぞろ巨大メディアが大連立や新党結成などはやし立てても、この種の安直な方式はむしろまじめな努力を無にしかねない禍ともいえる。

政治とは組織化することによってその本質がある。目指す方向を明らかにし、同志を募り、集まった人々を組織化して政治勢力に昇華させる。さまざまな政策分野でこのことが行われなければならない。

野田政権誕生の裏側には、多くの日本新党の仲間が再結集した。93年に政治改革を掲げて華々しく発足した細川護熙政権があっけなく散ってから、多くの離合集散があつた。再び政権交代可能な2大政党を作るといのが私や民主党の仲間たちの悲願であつた。それは、長期にわたった自民党独裁の弊害をリセットし、日本でも正常に政権交代が機能する新しい政治土壌を作りたいという意味に他ならなかった。民主党と自由党の合併を経てさらに「雪だるま」を押し上げ続け、09年夏の本格的な政権交代を果たすのに約15年の時を要している。

現在の政治状況は1920年代と酷似している。関東大震災、金融禁や財政削減によるデフレ状態、世界大恐慌によって日本全体

が景気悪化をたどり、なかでも東北地方が困窮化した。政治と経済界の癒着スキャンダル、軍部の中国侵出とそれを抑えられない内閣、いつしか国民は政治に失望し、その果てに選択したのが大政翼賛会であり、その道は太平洋戦争へとつながって行った。

3・11の未曾有の大震災は日本人のあらゆる意識構造をがらりと変えた。見え透いたパフォーマンズ政治を嫌悪する機運の片隅に、地に足のついた政治への渴望や、政治が果たすべき役割の大きさに対する根源的な期待が交錯しているように感じる。これらを一縷の光明として、政治家と国民とが互いに真摯に向かい合い、私たちは先に進んでいかなければならぬ。

野田政権は民主党に与えられた最後のチャンスであるといつても過言ではない。外交の失敗は一度で命取りだが、内政の失敗を恐れずに大胆に修正すれば良い。いまこの時点において野田内閣、すなわち民主党政権の重要な使命は二つ。一つは原発事故の収束と震災復興に全力を尽くすことであり、二つ目は痛んだ外交を立て直し、国際協調を促進させて世界経済の秩序と安定を取り戻すことにあると考える。